

『花田俊典の雪月花』

中西, 由紀子
北九州市立文学館

<https://doi.org/10.15017/11044>

出版情報 : 九大日文. 11, pp.119-120, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎紹介

『花田俊典の雪月花』

NAKANISHI
中 西 由 紀 子

本書は二〇〇〇年四月から三年間にわたり西日本新聞へ掲載されたコラム「雪月花」（四名の執筆者がリレー連載）のうち、著者・花田俊典の担当分をまとめたもの。全二四四編に書誌事項および、引用される作家、作品の索引を加え、刊行された。

沖繩を含む九州各地に山口までを加えたエリア設定を行う。それらへ言及したテキストの一部を掲出。「場」とテキスト、作者の関わりを読む文章が続く。毎回、原稿用紙一枚弱の分量に、このスタイルが保たれている。

著者にはすでに『清新な光景の軌跡―西日本戦後文学史―』（西日本新聞社、二〇〇二・五）という試みがある。エリア設定から明らかなように、本書はこの問題系を引き継いでいる。ここで「設定」という語を繰り返すのは、著者にとつての「西日本」が地理的に分割され、自明に屹立する実体ではないからだ。

同書の「あとがき」には、「西日本戦後文学」が一つの「ジャンル」であること、そして「ジャンル」は「実体」ではないことが断られている。「この自分を中心に周囲を三六〇度ぐるりと眺め渡したら、どんな光景が立ちのぼってくるのだろうか。」

周囲ぐるり三六〇度の「西日本（文学）」は「清新な光景」を「立ちのぼ」らせるための措定、仮構機能である。

一方、タイトルの「雪月花」は四季おりおり、そのときどきで最も味わい深いものを指す言葉。帯の惹句には「文学歳時記」とある。連載時からの編集方針として「暦にこだわった」とも仄聞した。一つ一つの場面としては瞬時に過ぎ去る一回性の出来事が、繰り返されるカレンダー（暦）の中で、日付に呼応し、新たにしかし再来する不思議が魅力的だ。

例えば、二〇〇〇年十月二十六日には永畑道子著『恋の華・白蓮事件』（新評論、一九八二・一）が取り上げられる。「常にあなたの愛はな」かったという、妻からの「絶縁状」。著者は、不自由のない暮らしを用意しながら『愛』のない結婚生活」を糾弾された夫の「わからん」というつぶやきを伝える。いわく「さぞ秋風が身にしみたらう」。歌人・柳原白蓮が筑豊の炭坑王・伊藤伝右衛門のもとを出走したのは、掲載からさかのぼること七九年前（一九二二年）同月二十日の出来事だった。

「恋愛」は近代に起源を持つ歴史的な価値観である。つまり、普遍的なものではない。しかし、そのものさしを身体化するかどうかで世の中は違つて見える。結婚観という最大事において互いに他者であつた夫婦の破綻が暦の上で呼び起こされている。

近年公開された旧伊藤邸を訪れるなら、やはり秋風を受けながらの季節が良いかもしれない。今日、白蓮に近い眼を持つ私たちは、伝右衛門の庭をどう眺めることができるだろうか。など、私は本書を著者の「書を捨てずに町へ出よう」として

読んだ。「町」は文字通り、西日本各地の「町」でもあるし、また、それを窓に広がる外界(他者)でもある。私たちのぐるり三六〇度周囲にも見知らぬ「町」が多くある。また見知ったつもの「町」も実は多くの見知らぬ時を刻んでいる。

本書の核となる「時」と「場」について、亀井秀雄がクロナ・トポスの認識、ということ述べている。さまざまな歴史的地層を積み込んだ個々の土地トポスには、もちろん傾向や特色があるだろう。しかし本来差異として見出されたはずのそれが、硬直した同一性として片づけられ、本質化されていないか。そうであるとすれば、それは歴史的にも地理的にもざわめいてはいるはずの個々のトポスを貧しくしているのではないか。

一つの枠組みのなかで、ある特定の地域との比較によって見出した特徴だけを、自分たちのトポスの「本質」として固定してしまうのではなくて、枠組みを変え、多様な比較対象を設定することによって、このトポスの多元性を明らかにし、その豊かさを再発見しよう(亀井秀雄「記念講演抄録」)

中野重治と北海道文学」¹⁾
スピヴァクならこの本質化を「イデオロギー的な平均値を基準とした直接的な了解可能性」と呼ぶだろう²⁾。そして、その「分かりやすさ」が「文学のもつ力を破壊してしまう」ことを懸念する。精密な地域研究を比較文学が補完する、と彼女が言うとき、その「文学」にかけられているのは、さまざまなトポスが持つ文化を「どれほど不完全かもしれないにせよ、他者化すること/他者として接する」と(othering)を自己目的として

努力しようとする用意のある、想像力をもった読者」になることである。

本書は二四四回にわたり、ぐるり三六〇度のトポスを異化する。知ったつもの「町」に他者として接し、その豊かさを「清新な光景」として想像(創造)する。そこには、雪の爆心地(二〇〇二年二月八日)があり、戦時下の合同ピクニック(二〇〇二年五月二八日)があり、朝鮮独立運動の志士が星をかぞえた刑務所(二〇〇三年二月三日)がある。

「慣れ親しんでいる空間を異化」すること、「固定された意味作用」と思われているものを「不安定化」すること、それを不断に自らへ課すことは、ときどき苦しい。空虚であつても、解が自動算出される方が楽なこともある。そこを踏みとどまるためには、やはり「努力」と「訓練」が必要なのかもしれない。

それでも、著者のように「裁判長浜が消えたから貝も消えました」(二〇〇一年一月二七日)といった声が聞こえるようになったら、それはかなりうれしいことではないだろうか。地名を冠した文学を生業とする一人の自戒として思うのである。

【注記】

1 「市立小樽文学館報」二二(二〇〇〇・一一)より。ただし、引用は <http://www4.ocn.ne.jp/~otarbun/bungakukan/kampou/kampou22.html>

2 G・C・スピヴァク/上村忠男・鈴木聡共訳「ある学問の死 惑星思考の比較文学へ」(みすず書房、二〇〇四・五)。以下、引用同。

(二〇〇七年六月 西日本新聞社 二六七頁 一三三八円＋税)